

**コミュニケーション力の育成における学生たちの自己成長への気づき
—授業の体験型活動に対する調査アンケートに基づいて—
Students' Perceptions of Self-Growth in Developing Communication Skills
—Based on a Survey of Experiential Class Activities—**

許 夏玲

東京学芸大学国際交流/留学生センター

要旨

筆者の担当している科目において、多文化共生社会に備えるためのコミュニケーション力の育成をめざして、学部生および大学院生を対象に、社会連携の体験活動を実践した。学生たちがこれらの体験活動に参加することでどのように自分が成長し、またコミュニケーション力が向上できたかを調査する。本調査により、コミュニケーション力の育成における学生たちの自己成長の気づきなどへの理解が期待できる。

調査の結果、日本人学生は非母語話者の留学生に対するコミュニケーションの取り方を特に気にかけているため、コミュニケーション力が得られ、また物事の考え方などの思考能力が向上できたという。一方、今まで主に語学学習に取り組んできた一部の留学生にとって、日本語教育や現代社会に関連した語学以外の専門知識の能力も得られた。

しかし、日本人学生にとって、外国人との接触機会があまりないと想定され、留学生の日本語力や話の展開などに戸惑っている傾向がある。一方、留学生では主に日本語力の不足のため、コミュニケーションの取り方に困っている傾向が強い。

キーワード：

多文化共生社会、コミュニケーション力、体験活動、日本語教育、自己成長

コミュニケーション力の育成における学生たちの自己成長への気づき —授業の体験型活動に対する調査アンケートに基づいて—

許 夏玲

東京学芸大学国際交流/留学生センター

1. はじめに

近年、海外の日本語学習者数は約400万人を超え、日本語教育を実施している国・地域は約216にも達している（2024年度国際交流基金調査）。国内の日本語学習者数についても、約26万人を超えており、また子ども、留学生、ビジネスパーソン、看護師・介護福祉士、地域の生活者など、学習者の多様化も進んでいる。日本語学習は、もはや語学学習のみではないと考えるべきだと言える（許2025）。これに関して、川上（2017）は「私たちの課題は、日本語教育の社会的役割と位置付け、あるいは公共性についての議論をどのように打ち立てていくのかということではないでしょうか。ここで日本語教育の公共性というときの『公共性』とは、『公共事業』『公共政策』といった国レベルの行政の＜公益＞の意味ではなく、社会のあり方、人のあり方、そして社会とことば、人とことばを考えるとときの言語教育としての日本語教育の視点をいいます。」（2017：ii）としている。

日本国内において、令和6年10月末の時点で外国人労働者数は2,302,587人、国籍別では、ベトナムが最も多く570,708人、次いで中国408,805人、フィリピン245,565人の順になっている。その中で「専門的・技術的分野の在留資格」「身分に基づく在留資格」「技能実習」が上位3つの労働者の資格となっている。外国人労働者数が多く分布しているのは、東京（585,791人）、愛知（229,627人）、大阪（174,699人）、神奈川（134,101人）、埼玉（120,062人）などの順になっている（令和6年厚生労働省調査）。このように、日本は多文化共生社会の方向へ進んでいる傾向が見られる。

令和7年度には、筆者の担当している科目において、多文化共生社会に備えるためのコミュニケーション力の育成をめざして、学部生および大学院生（留学生も含む）を対象に、社会連携の体験活動を実践した。学生たちがこれらの体験活動に参加することでどのように自分が成長し、またコミュニケーション力が向上できたかを調査したいと考えている。本調査により、コミュニケーション力の育成における学生たちの自己成長の気づきなどへの理解が期待できる。

2. 調査対象と概要

調査対象者は、学部生（日本人学生1年生、外国人留学生3年生～4年生[研究生、交換留学生、日本語日本文化研修留学生, JLPT N1～N2相当の日本語力]）とする。筆者の担当しているのは「多文化共修科目群」の一つで「多文化共生と日本語教育」をテーマとした科目である。「多文化共修科目」は学部の正規生（主に日本人学生）が履修できるCA科目（学部の教養科目）として同時に開講されており、留学生と日本人学生が共に議論しながら、世界の文化や社会や多様性について、学びを深めることが目的として開設されている。日本人学部生が入学後の1年生の間に履修できる科目と設定されている。これらの科目は、同じキャンパスにいる日本人学生および外国人留学生の出会いの場、交流の場として提供できるため、国際交流を促進するための一つのきっかけともなっている。

筆者の担当している「多文化共生と日本語教育」のねらいと目標は、「多文化共生の観点から日本語教育をどのように捉えるか、また日本語教育の分野で比較的に関心のあるテーマをいくつか取り上げて、多文化共生とどのように関わっているかについて考える。そこで、日本語母語話者および外国人学習者の言語行動の対照・比較を通して、先行研究および様々な事例に基づいて、両言語使用者の言語的特徴や文化背景、習慣などの共通点および相違点について論じる」と設定している。授業では、文体、言語能力と運用能力、誤用研究、メタ言語、オノマトペ、言語転移、若者言葉、日本企業と外国人、ファシリテーション（ゲストスピーカー）、日本語学習支援、地域の日本語ボランティア教室（ゲストスピーカー）、グループワーク（研究課題の発表）などのテーマや活動を取り組んでいる。各回の授業では、クイズやタスクを取り入れて、日本人学生と留学生がグループになってディスカッションの時間も設けて互いに交流できるようにしている。

また、社会連携の体験活動（たとえば、ファシリテーション講座、国際交流協会と学習支援教室のゲストトーク）を実施することで、学生が教員による講義のみでなく、地域社会の実情を知るエキスパートとの交流も期待できると考えている。

授業後、上述のような体験活動に参加した学生たちに意識調査のアンケートの協力を依頼し、体験活動による自己成長の気づき、コミュニケーション力の向上、また多文化共生における学生たちのコミュニケーション上の問題点等を明らかにする。

3. 調査結果

今回の調査アンケートは授業の終了後に依頼し、学部で実施される授業アンケートの実施時期と重なっているためか、当初の36名の受講者から半数程度の回答(18名)しか回収できなかった。しかし、回答者の回答から日本人学生および留学生の感想や一定の考え方がうかがえるため、今後の改善案に繋がる参考情報に値すると考えている。調査結果は次のようにまとめられる。

日本人学生（女性11名，男性1名）

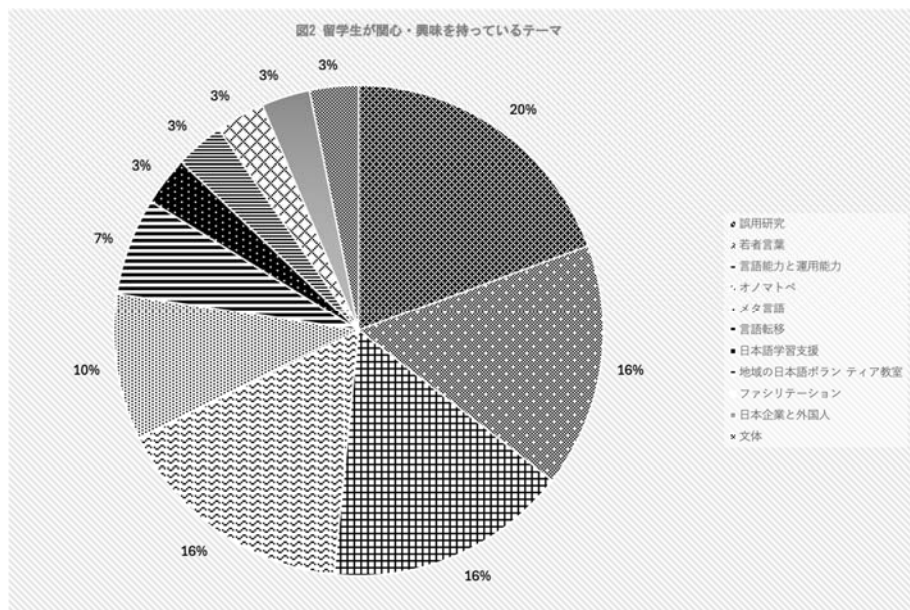
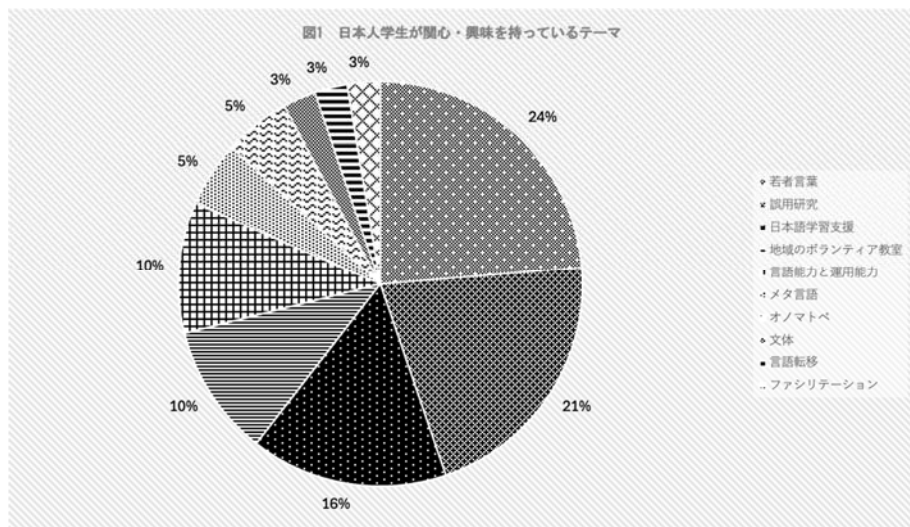
留学生（女性4名，男性1名，回答しない1名）

- ・ 今学期の多文化共修科目（筆者担当）のテーマについて興味を持って受講できましたか。[興味を示す度合い V（高い）～ I（低い）]
日本人学生 V 4名, IV 4名, III 4名
留学生 V 4名, IV 2名

今回の調査では興味を示す度合いのIとIIを選択した学生はいなかった。テーマによって興味や関心も異なるが、グループでディスカッションの時間になると、活気が湧いてくる。また、タスクについての話し合いが終わると、自由会話のような時間に大いに盛り上がる様子も見られた。

- ・ どのテーマに関心・興味を持っていますか。[複数選択可]
日本人学生 若者言葉 9名(24%), 誤用研究 8名(21%), 日本語学習支援 6名(16%), 地域のボランティア教室 4名(10%), 言語能力と運用能力 4名(10%), メタ言語 2名(5%), オノマトペ 2名(5%), 文体/言語転移/ファシリテーション 各1名（各3%）
留学生 誤用研究 6名(20%), オノマトペ 5名(16%), 言語能力と運用能力 5名(16%), 若者言葉 5名(16%), メタ言語 3名(10%), 言語転移 2名(7%), 日本語学習支援/日本企業と外国人/ファシリテーション/地域の日本語ボランティア教室/文体 各1名（各3%）

上記の回答数を次の図1と図2に示している。

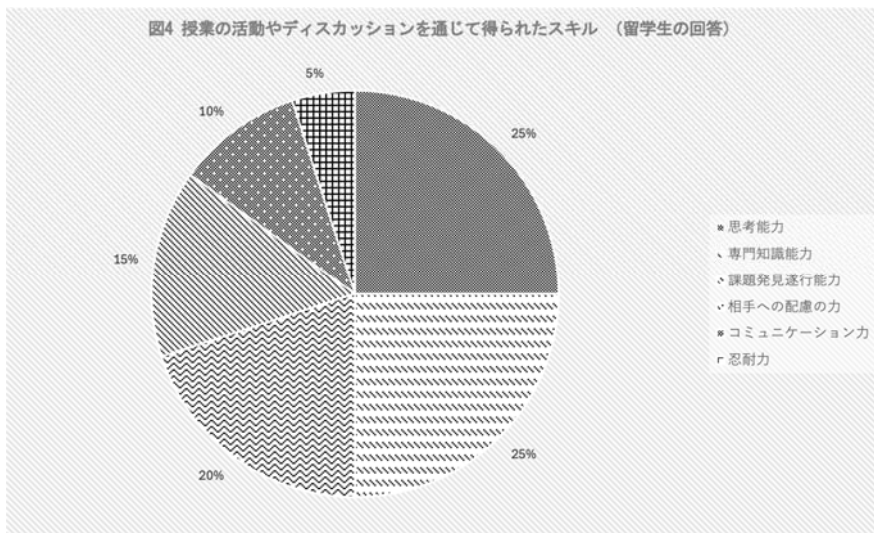
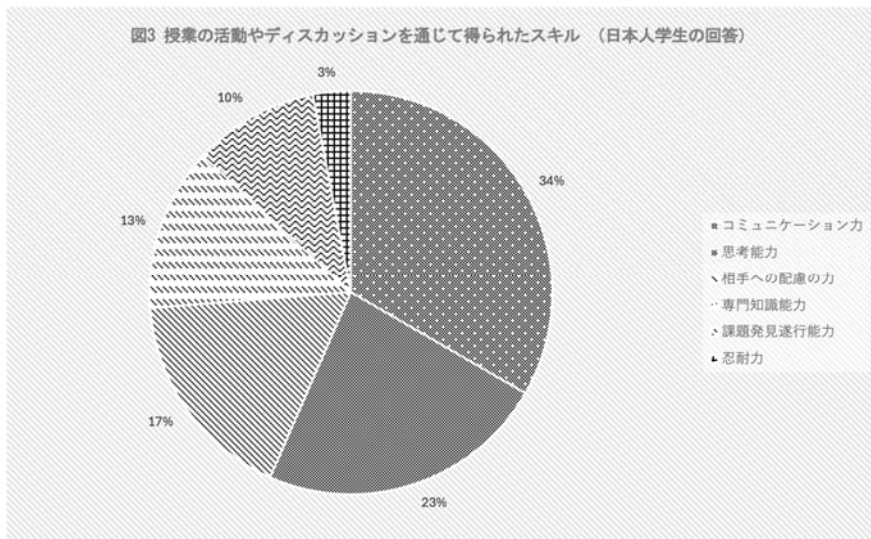


共修の授業とは言え、日本人学生と留学生の関心や興味が学習の目標によって異なることがうかがえる。日本人学生は自分自身や現代社会に関連すること、教育関連のこと、などに関心を持っているのに対し、留学生は日本語の学習に関心を持っている。ファシリテーターとして備える資質や地域の日本語教室に対する認識がまだ不足しているためか、学生の専門領域が様々であるためか、関心が薄れていることがわかる。今後の課題として改善策について検討していく必要がある。

コミュニケーション力の育成における学生たちの自己成長への気づき
—授業の体験型活動に対する調査アンケートに基づいて—

- ・この授業の活動やディスカッションを通じて得られたスキル[複数回答可]
日本人学生 コミュニケーション力 10名(33%), 思考能力 7名(23%),
相手への配慮の力 5名(17%), 専門知識能力 4名(13%),
課題発見遂行能力 3名(10%), 忍耐力 1名(3%)
留学生 思考能力 5名(25%), 専門知識能力 5名(25%), 課題発見
遂行能力 4名(20%), 相手への配慮の力 3名(15%), コミュ
ニケーション力 2名(10%), 忍耐力 1名(5%)

上記の回答数を図3と図4に示している。



徳間（2012:93）では、「人は、新たな自己を生成するため、社会の中で絶えずやりとりをし、それを重ね、連ねていくという営みをなす。よって、『コミュニケーションすること』とは、『人が生きること』そのものであり、その営みの過程で人は成長する」と述べられている。今回の調査結果を見ると、体験型活動や多文化でのディスカッションを通じて学生たちの得られたスキルは、日本人学生と留学生とでは異なることがわかる。日本人学生は新入学の1年生であるため、外国人との接触経験がそれほど多くないと想定され、非母語話者の留学生に対するコミュニケーションの取り方を特に気にしている傾向がうかがえる。また、各回の授業で提示されるタスクやクイズについて意見交換やディスカッションが行われたためか、物事の考え方などの思考能力が向上できたという感想が寄せられた。今まで主に語学学習に取り組んできた一部の留学生にとって、日本語教育や現代社会に関連した語学以外の専門知識の能力も得られたという。

- ・活動中で留学生/日本人学生とのコミュニケーションがうまくできましたか。

[V（高い） ～ I（低い）]

日本人学生 V 2名, IV 4名, III 6名

留学生 V 3名, IV 1名, III 2名

学部1年生の日本人学生は、今まで外国人との接触機会があまりないと想定され、留学生の日本語力や話の展開などに戸惑っている傾向がある。それに対し、留学生では主に日本語力の不足のため、コミュニケーションの取り方に困っているように見られるが、日本で生活している留学生は、日本語や日本人に囲まれている環境にいるため、比較的接触場面に慣れているとも言えよう。

- ・留学生/日本人学生とのコミュニケーションで、特に自信を持っているもの、自分自身がまだ不十分だと感じているものについて教えてください。

日本人学生

- ・「聞いて受け止めることはできたが、疎通がうまくいかなかった時にどうすればいいかわからず困ってしまった。これからのかわりの中ではもう少し会話をリードできるようになりたい。」（学生A）
- ・「グループ学習になれば話すが、自ら留学生にコミュニケーションをとりについていなかったと思う。」（学生B）

**コミュニケーション力の育成における学生たちの自己成長への気づき
—授業の体験型活動に対する調査アンケートに基づいて—**

- ・「会話を始めれば質問などをし、会話が広がるが、それまでがどのように切り出しているのか分からず気まずい雰囲気が流れる。」(学生C)
- ・「自信を持っているというより意識していることだが、簡単な日本語で話すようにしている。一方で日本語学習者のレベルが高いともう少し特定の難しい言葉を使っても伝わるだろうという気持ちもあるので、逆に失礼になっていないかその配慮が難しい。」(学生D)
- ・「もう少し留学生と交流する機会があるといいと感じた。」(学生E)

日本人学生の回答として、他にも「留学生としての目線や意見を積極的に聞く」「留学生の理解度や考え方がわからないので会話が難しいと感じた。考え方が違うのではないかと消極的になってしまった」、「留学生の理解度に合わせてスピードや内容を変えなければならない」といった感想が寄せられた。

一方、下記の回答からうかがえるように、留学生側では自分の日本語力の不足や日本語母語話者の話すスピードにあまり追いつかないということがわかる。

留学生

- ・「自信を持っているものは特にありませんが、自分自身がまだ不十分だと感じているものは、自分の意見を日本語で伝えることだと思います。頭の中にいろいろな意見があって伝えたいのですが、自分の今の日本語能力のため、あまり伝われないことが多かったです。」(学生F)
 - ・「やはり時々母語話者の話すスピードに追いつけられず、聞き返せずに聞き流してしまいました。特に自信を持っているものは思い浮べませんでしたが、日本人学生とのコミュニケーションで、きちんと目線を向けて、相槌もできるだけしてきましたので、よくできたと思います。」(学生G)
 - ・「いろいろしてなんとか自分の考えを伝えましたが、詳しく伝えられるまで頑張らなければなりません。」(学生H)
 - ・「この授業で日本人の学生との話が前より良くなりました。」(学生I)
- ・留学生/日本人学生とのコミュニケーションで、一番気に入っている点を教えてください。

日本人学生

- ・「ディスカッション(話し合い?)をするときに、自分の意見と留学生の意見をうまくまとめられたときや、留学生の文化を新しく知れた時は面白いと思った。」(学生A)

- ・「言葉だけではなく、身振り、表情、声色からも情報を得ようと互いに意識できる点。」(学生 J)
- ・「考え方が違うため、いろんな意見が出てとてもおもしろかった。みんな日本を好んでくれていることがうれしかった。」(学生 K)
- ・「自分には全くなかった視点を提供してくれること」(学生 L)
- ・「グループ活動では深く話すことが出来た。」(学生 E)

日本人学生の回答(上記の回答も含む)から見ると、互いの文化の相違点や言い回しの文化(3名)、留学生の来日動機(日本が好きなこと)(2名)、違う考え方や疑問点を知ること(2名)、違う考え方や疑問点を知ること(2名)テンションや細かい感じ方の差、言葉だけでなく、身振り、音声、表情などからも情報が得られること、全く新しい視点、グループ活動で話を深めたこと、話せば割と仲良くなれることがまとめられる。

一方、留学生側では、日本人学生と様々な国の学生と意見交換や交流ができたこと(2名)、日本人学生の優しさと配慮による安心感が感じられたこと、互いの距離感を縮める取り組み、日本人独特な言い方を知ること、日本人学生が自分に興味を持っていることから嬉しかったと回答している。例えば、次のような回答があった。

留学生

- ・「日本人が自分に興味持っていくかどうかという点。」(学生 M)
- ・「コミュニケーションで、日本人とも色々な国から来た外国人とも話し合っって意見を交換してよかったです。」(学生 N)
- ・「コミュニケーションの中で、母語話者は配慮して熱心に留学生に関わってもらって、優しさと安心感を感じました。」(学生 G)
- ・「日本人の特独な修飾方が面白くて、いつも真似していました。」(学生 O)

徳間(2012:102)では、「授業実践の場とは、『作られた場や制限された場、非現実的で社会と切り離された場』という否定的な見方での特殊性を問題視するべきではなく、『学習者に自己内省や他者との対話の機会を提供し、社会性と主体性を帯びた、学習者の新たな自己の創出を支援し得る場』となることができる。」としている。以上をふまえて、社会連携による体験活動や多文化の学習環境でのディスカッションを通じて、社会との繋がり、また他者との対話による気づきや内省を促すことが期待できると筆者は考えている。

**コミュニケーション力の育成における学生たちの自己成長への気づき
—授業の体験型活動に対する調査アンケートに基づいて—**

今回の調査では、地域社会の実情を知るエキスパートとの交流も目的とした社会連携の体験活動（例えば、ファシリテーション講座、国際交流協会と学習支援教室のゲストトーク）に参加した学生の感想についても聞いた。日本人学生から V～VI の高評価（7 名）、III のような普通の評価（4 名）、関心を持たない I の評価（1 名）を受けた。留学生側でも V の高評価（3 名）、III のような普通の評価（3 名）と回答された。高評価と回答した学生たちもおられるが、学生たちが何を期待してこれらの社会連携の体験活動にするか、また学生たちがどのようなことに興味を持っているかを今後の課題として検討していく必要があると思われる。

- ・授業活動などへの関わりを通じて自分の就職や将来の進路にとって参考になりましたか。

日本人学生

- ・ある程度参考になった（6 名）
- ・大いに参考になった（2 名）
- ・どちらとも言えない（2 名）
- ・全然参考にならなかった（2 名）

留学生

- ・大いに参考になった（2 名）
- ・ある程度参考になった（2 名）
- ・わからない（1 名）
- ・あまり参考にならなかった（1 名）

学生たちは、全員が日本語教育を専門分野としているわけではないため、「日本語」「多文化交流」「外国人児童の学習支援」を主な履修の動機として受講したと見られる。また、日本人の学部生にとって入学後の 1 年次であるため、外国人との接触の機会や外国人から見た日本のこと、多様多種の文化習慣や考え方への体験も自己成長に繋げるきっかけとなっているのだろう。

4. まとめ

今回は、筆者の担当した「多文化共生と日本語教育」（「多文化共修科目群」）を受講した学生たちを対象に、体験活動を通じて、多文化のコミュニケーションの中で彼らのコミュニケーション力や自己成長への気づきについて調査を行った。これまで述べられたことは次のようにまとめられる。

体験活動や多文化でのディスカッションを通じて学生たちの得られたスキルは、日本人学生と留学生とは異なる。日本人学生は外国人との接触経験がそれほど多くないと想定され、非母語話者の留学生に対するコミュニケーションの取り方を特に気にしている傾向がうかがえる。また、各回の授業で提示されるタスクやクイズにおいて意見交換やディスカッションが行われたためか、物事の考え方などの思考能力が向上できたという。しかし、毎回の授業テーマが決まっており、また授業時間（一コマ100分）の都合上、授業の後半に行われる30分～40分の意見交換やディスカッションの時間は限定的である。今後、授業予定について見直しを行い、コミュニケーションの取れる時間やグループワークを多く取り入れたいと考えている。一方、今まで主に語学学習に取り組んできた一部の留学生にとって、日本語教育や現代社会に関連した語学以外の専門知識の能力も得られた。

また、日本人学生にとって、外国人との接触機会があまりないと想定され、留学生の日本語力や話の展開などに戸惑っている傾向がある。授業ではディスカッションやミーティングがスムーズに進むためのコミュニケーションの取り方を目的とするファシリテーションも取り入れることを試みたが、まだ効果が薄いと言えよう。今回の調査結果を参考に、今後調査アンケートの実施時期、質問項目の追加、フォローアップインタビューの実施などについて再検討し、より多方面から学生の異文化交流における意識変化を理解していきたい。

一方で、留学生では主に日本語力の不足のため、コミュニケーションの取り方に困っている。その中で、特に話題を深める時の自分の考えの伝え方や、日本語母語話者の話すスピードにあまり追いつかないことが課題として挙げられる。これらの学習者の困難点については、プレゼンテーションやディスカッションの場面での会話表現の導入や練習が必要になり、また生の教材を用いたリスニングのトレーニングも欠かせないと考えられる。

5. 今後の課題

今回の調査は期間と範囲が限られているため、結果が限定的であることは否めないものの、学生たちの感想や自己成長への気づきなど、生の声が聞けたため、今後の授業の組み方や重点の置き方に改善のヒントを示唆してくれたと考えている。このような調査は一定の期間にわたって継続していく必要があり、そうすれば日本人学生および留学生のニーズ、成長過程についてより理解を深めることができると思われる。

コミュニケーション力の育成における学生たちの自己成長への気づき
ー授業の体験型活動に対する調査アンケートに基づいてー

参考文献

- 川上郁雄 編 (2017) 「序 なぜ『公共日本語教育学』の構築なのか」『公共日本語教育学社会をつくる日本語教育』くろしお出版, ii
- 徳間晴美 (2012) 「日本語学習者の『人としての成長』を考える待遇コミュニケーション教育」『早稲田日本語教育学』11号, pp.93-107
- 許夏玲 (2025) 「学習支援活動における支援者と外国人児童のコミュニケーションの分析：関係構築のためのポライトネス・ストラテジーに注目して」『東京学芸大学紀要機構76』 pp.33-42

参考資料

- 「『外国人雇用状況』の届出状況まとめ」令和6年調査, 厚生労働省
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_50256.html (2025年10月28日)
- 「2024年度 海外日本語教育機関調査 結果概要」国際交流基金
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/information.html> (2025年10月27日)
- 「令和5年度日本語教育実態調査 国内の日本語教育の概要」文部科学省
https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/nihongokyoiku_jittai/kekka/mext_00002.htm. (2025年10月27日)